第９１号のテーマ
春は区切りの時
視点を変えて
つなげよう！

府中市生涯学習センター
生涯楽習だより
第９１号 <春号>
2025年4月1日 発行

第９１号 目次

P.1　変わりゆく時代と私たちの生涯学習
P.2　馬場大門ケヤキ並木を次代につなぐ
P.3　武蔵國府太鼓の伝承と普及　八木さん
P.4　隣市を訪ねて多摩市の散策取材

WEB版

企画・編集／生涯学習ボランティア「悠学の会」
共同発行／府中市文化スポーツ部文化生涯学習課 府中市生涯学習センター

変わりゆく時代と私たちの生涯学習

生涯学習センター 副館長 **椎名靖孝**

2025年は、これまでの歴史の中で最も大きく変わりゆく年になるのではないかと考えられています。特に注目すべきは、急速に進化するＡＩ技術とデジタル革命の加速です。

実際、ＡＩ技術とデジタル革命の進化は、現代社会における根本的な変化をもたらしています。

例えば、無人のコンビニエンスストアでＡＩが顧客対応を行う様子や、遠隔医療による診断が普及する近未来は既に予想されています。また、文章作成、音楽制作、映像編集、ＷＥＢデザインなどの分野でも、制作者がＡＩの手を借りたり、代替する場面が増えています。これらのように従来の職業のあり方が大きく変わり、ＡＩが人間とともに働く時代はもう来ていると言っても過言ではないようです。

さらに、ＡＩの進化は、単純な事務作業ルーチンワークに留まらず、分析、判断、そしてクリエイティブな領域にも広く期待されています。これまでは人間の知恵や直感に頼っていた多くの業務がＡＩによって効率化され、あるいは新たな形式で提供されるようになるでしょう。

また、私たちの身近なところでは、キャッシュレス社会への移行が急速に進むことにより、現金での支払いが減り、デジタル通貨や電子決済が主流になり、現金を持たない生活が一般化すると考えられています。これに伴い、個人の経済活動のあり方も変わり、より効率的で迅速な決済を可能とする生活に代わっていくことでしょう。

これらの急激な変化に私たちが適応するためには従来の価値観に代わる、新しい時代に向けての適応力を高めることが重要になってきます。そのためにも「恐れずに変化を受け入れる」ことが求められてきます。

1998年にアメリカで出版された『チーズはどこへ消えた？』は、まさに今の私たちが直面しているような状況のなかで、変化に適応することの重要性を教えてくれる物語です。シンプルな寓話を通じて「変化への適応の大切さ」を説いた世界的なベストセラーなので、既に読まれた方も多いと思います。

登場人物のヘムは状況の変化を恐れて終始控えていますが、ホーは状況の変化に柔軟に対応し、前に進みます。物語では、変化にどのように適応し、どのように活用するか、恐れることなく変化を受け入れ、柔軟に対応することが、私たちの未来を開く鍵であり、新たなチャンスへの入り口だと示しています。

今、私たちの目前に迫る同じような急激な社会変化の中で、「生涯学習」の重要性はさらに増していくと考えています。

生涯学習センターでは、これら変化を見極めつつ、時代に即した講座やイベントを企画し、みなさまのお役に立てるよう力を尽くして参ります。

表紙のつぶやき

３ヶ月の区切りを大切に

人間の細胞の多くは３ヶ月で入れ変わると聞きました。３ヶ月というのは１つの区切りなんですね

年初めに掲げた目標も３ヶ月で色褪せていませんか。春を迎え、塗り直すなり看板をかけなおすなりして再出発です。新しいことへの挑戦は脳の活性化、心の活性化にもつながります。春風を浴びながら、新たなチャレンジに Let's go！　楽しいことがありそうだ。（西谷信昭）

悠学短信
話題を追って

「国天然記念物 馬場大門のケヤキ並木」を次代につなぐ取組みとは

「国天然記念物 馬場大門のケヤキ並木」が指定 100 周年を迎えた。貴重な並木を保護し次世代に伝えていく取組みがあると聞く。その中心で活躍されている 都立農業高校 緑地計画科 専修実習助手の田口喜朗先生に、詳しいことを伺ってみた。

先生がプロジェクトに関わられた経緯は

私が、都立農業高校に赴任してきたのは 11 年前です。まず取り組んだのは桜の苗木造り、生徒たちと種から育てました。3 メートル位まで育ったので、桜通りの古木の更新に使ってもらおうと思って市に連絡したら、すでに事業も進んでおり、植える品種も違うので残念ながらということでした。

その後、市のふるさと文化財課から、ケヤキ並木の種から苗木を育てて欲しいとの依頼があり、「国天然記念物 馬場大門のケヤキ並木保護更新プロジェクト」を立ち上げ、やってみることになったのです。

①

②

プロジェクトではどのようなことをされたのですか

私は、造園や林業関係に 30 年位携わっていますけれど、ケヤキの種子がどんなものなのか全く知りませんでした。ネットで調べてみると、ほんの 3 mm 程度のものだったんですね。秋に落ちるということなので、とりあえず 並木に行ってそういう種子をさがしてみたのですが、最初はこれかな、あれかなって考えつつ、間違えて砂粒を拾ったりで、試行錯誤の毎日でした。その後、落ちている小さな枝に種子が付いているのを見つけ（写真①）、「あ！これだ」となって、毎週金曜日の夕方、生徒たちと種子拾いに行きました。これが始まりです。

③

10 月分、11 月前半分、後半分、12 月分と集めてデータにすると、種子は 11 月が一番多く落ちていました。後で分かったことですが、種子は鳩が食べるので夕方ではすでに食べられた後になり 10 月 12 月は少なく、11 月は種子の落ちる量も多く鳩も食べきれないということなのでしょう。集めた種子を蒔くと、だいたい 10%くらいが発芽します。その中から良いものを残し苗に仕立てていくと、3 年で 3m くらいの若木になります（写真②）。市から小学生中学生にも体験させたいという申し出があったので、種まきや育苗に参加してもらったり学校に植樹したり、武蔵府中郵便局前の並木の中で苗を育てる実験をしたり（写真③）しています。また、大きく育った苗木は、古木の代わりとしてすでに並木の北端や南端に移植しています（写真④）。

④

いずれにしても、子供たちが通学途中に自分の植えた木の成長を見守ったり、将来自分の子供や孫に大きく育ったケヤキを指さして「これは私が植えたのよ」と言えることは素晴らしいことだと思ってプロジェクトで、種を集めて蒔く、苗を育てる、移植するという行程のシステム作りを進めています。

今後の継承についてはどのように考えておられますか

私はもうすぐ府中を離れ新しい赴任先に行きますが、次の指導者にしっかりとこの種まきから植樹までの育成システムを伝えていこうと思っています。よく「1 年先を考えるなら作物を作れ、10 年先を考えるなら木を植えよ、100 年先を考えるなら人を育てよ」と言います。まさに木を育て人を育てる大きな事業を、天然記念物のケヤキ並木で実践できたことを、幸運だったと思っています。

市民のみなさんに伝えたいことは

「大國魂神社鳥居前のケヤキの DNA を受け継いだ苗も接ぎ木で作りました。万が一台風などで倒れたりしても、次世代が育っているので、みなさん安心してください」

「土壌改良には、ケヤキ並木の落ち葉をたい肥にして利用しますが、落ち葉はシルバー人材センターの方たちが集めて提供していただいています。ごみの混ざりがほとんどなく、本当に感謝しています。

このようにオール府中でケヤキ並木を守っているのに感動しました」

学び返しで明日につなぐ　その〔2〕

武蔵国府太鼓の普及と伝承に取り組む想いとは

武蔵国府太鼓 翔駒会（しょうまかい）会長　八木隆史さん（若松町）

学生時代から始めて今まで続けている武蔵国府太鼓の普及と伝承を目指して、日々活動している八木会長。その苦労や喜びをうかがった。（取材/井口文江・西谷信昭）

― 太鼓に興味を持たれたのは

府中は、日常的にも太鼓のある街ですので、その影響もあると思いますが、直接的には大学生の頃、テレビで和太鼓の鼓童の演奏を見て「かっこいいな、やりたいな」と思ったのが最初だと思います。その後、府中市の武蔵国府太鼓初級者講習生の募集があり、応募して始めました。

講習会７期生として１年間、楽しく厳しく（笑）教えてもらって少し打てるようになりました。その後７期生と８期生が中心になって武蔵国府太鼓の新しいグループ翔駒会ができ、私もそこに入会しました。武蔵国府太鼓には響会、翔駒会、國府陸會の３つの会があり武蔵国府太鼓連盟を作っています。この連盟に府中市（現在は府中文化振興財団）から初級者講習会の運営を委託されており、連盟各会が交代で講師を担当しています。

郷土の森 あじさい祭での演奏風景

― 武蔵国府太鼓とは具体的にどのようなものですか

武蔵国の中心地として栄えてきた府中市の自然、歴史、風土をモチーフとして盛り込んだ全９曲から構成されていて、昭和57年東京芸術大学南弘明名誉教授に作曲していただきました（1曲は國府太鼓連盟作曲）。代表曲として、序章となる「乱れ打ち」、武蔵野を疾駆する若駒の躍動を描いた「府中勇み駒」、清らかな多摩川の流れを、源流から海まで表現した「多摩川流れ打ち」、勇壮な天下分け目の戦いを描いた「分倍河原合戦太鼓」、伝統ある大國魂神社例大祭くらやみ祭りの活気あふれる市民の情熱を表現した「くらやみ太鼓」などがあります。

演奏には、大太鼓（直径（約120cm）、中太鼓（約90cm）、小太鼓（約60cm）を使い、楽譜をもとにそれぞれの響きを細やかに調和させながら、物語や情景を表現していくものです。なかなか難しいですが、演者にとっては楽しくもあり、これが醍醐味ですね。

― 講習会で教える立場となって、苦労されたことは

講習生は初めて太鼓に触れる方も多く、基礎から教えることになります。私も最近39期生を教えましたけれど、なかなか皆さんの興味を引きながらやっていくには色々な工夫がいるなと感じました。

そこで活きたのは少年野球でのコーチ経験、子供達に教えるノウハウです。まずはやり方を教え、そして実践。そんな流れの中で子供たちがボールを捕ったり投げたりできるようになるのを見ているので、太鼓でも活かせないかな？と思ってやってみました。まずは言葉で「ドンドコドン」と口を動かして、それに合わせて「ドンドコドン」と腕を振って太鼓を打ってみる。口で発するリズムに身体を連動させていく。難しく考えるよりリズムに合わせて体が動いてしまう。案外はまる人が多いなという印象があります。上手くいかない場合は、オヤジギャグで切り抜けています（汗）

でも苦労ばかりではありません。研修生が上手くなっていく姿を見たり、演奏会で喜んでいる姿に接したりすると、本当に良かったと心から嬉しく思います。

39期生のT-シャツにもドンドコドンが

― 翔駒会は、普段どのような活動をされていますか

翔駒会の会員は10代からシニア世代まで、現在26人で活動しています。主に、市内の文化センター祭、介護施設慰問、お台場での小児がん啓発イベント、国府太鼓連盟として５月３日のくらやみ祭りけやき並木演奏、秋の府中芸術文化祭、市民さくら祭、能登半島地震復興チャリティー（タイトル右の写真）等で演奏しています。

様々な場面で演奏することで市民の方をはじめ多くの方に武蔵国府太鼓や府中に興味を持っていただければ嬉しいなと思います。

― 個人的にも若手を育てることに取り組んでいるそうですが

息子がお世話になったご縁で学童野球チーム（府中四小ファイターズ）のコーチを20年近くやっています。教える難しさもありますが、その子供たちが高校野球まで続けてくれて、夏の甲子園の予選を応援に行くのが楽しみになっています。あの小さかった子供が自分より大きくなり、懸命に野球に取り組む姿を見るのが、大きな喜びです。その子供達が大人になり、またその次の世代に野球を教えてくれると良いなと思います。

また、勤務先の大学で、私が地元で和太鼓をやっているとの情報を聞いた和太鼓好きな学生が「和太鼓部を作りたい」と相談に来たのがきっかけで和太鼓サークル（中央大学「鼓央」）ができ、22年にわたり続いています。和太鼓初心者の入学生が、大学卒業する頃には立派な和太鼓打ち、表現者に成長していきます。顧問として太鼓好きの遺伝子が継承されて行くのを間近に見ると感慨深いです。サークル設立期のOBOGが子供を連れてくると、おじいちゃんになった気分になります（笑）。

いずれにしても、受け継ぎそれを次の世代に受け渡していくことを考える時、それが受け継ぐ人の人生を豊かにする“楽しいもの”であって欲しいと願っています。

ふちゅう東西南北　隣接市の"学びのスポット"巡り～多摩市編

府中市の南に接する多摩市、聖蹟桜ヶ丘付近や永山付近、多摩センター付近と見どころはいろいろありますが、今回は市の中間部を多摩センターから横断してみました。

≪多摩市での印象≫　今回の多摩市散策で印象に残った事がある。

一つは多摩センター駅近くの「縄文の森」。ここには竪穴住居などが復元され、実際中に入って古代人の生活を体感できる。たまたま保守管理の人に出合い、復元物の傷み具合や傷む原因など熱心に教えられた。例えば茅葺屋根に生えた植物を良かれと思って抜いたりすると、深く張った根のせいで大穴が開いてしまうらしい。また、損傷箇所が増えると復元作業をした人からクレームが来るとのことで、その後はにわかに保守する立場の視点に変わり細部も注視することにした。

次は、旧多磨聖蹟記念館。明治天皇の多摩行幸を記念して昭和５年竣工のユニークな洋風建築物。建物そばには椅子に腰掛け、望遠カメラを構えた人がいた。思わず「狙いは何ですか？」と問うと「自分でも何が現れるか判らない」の返事。趣味？とは言え寒くなってきた２月の夕暮時のじっと辛抱は大変だと感心した。（竹村　稔）

≪ハラハラドキドキ≫　初一人旅。方向音痴の私が、一念発起。多摩市にある“揚げではなく焼きかりん糖”という発想が面白いと感じ、扱っているお店を探していざ永山駅へ。が、直ぐに迷子になるのでバスで行った。案の定お店が判らず一騒動。アンテナショップ・ポンテでは多摩の特産品や新しい動きについて色々聞いた。帰りもバス。車窓の景色を見ながら、帰る迄に何人の人に聞くだろう？と。今４人。うーん。駅に着いてからも案内標識が見当たらず又聞いた。結局５人。帰宅後直ぐにお茶タイム。温かい対応をして下さった方々に感謝しつつ、美味しく新商品の「永どんクッキー」を食べた。縮んだ寿命が伸びた。

後日散策仲間で、パリーン・ポリポリ～。（山田詩子）

≪都立埋蔵文化財センター≫　多摩センター駅から東方面に５分ほど歩くと左側にあります。そこは展示コーナーになっていて、多摩ニュータウン遺跡から出土した縄文土器や農機具などが展示されています。

隣接した場所に遺跡庭園「縄文の村」があり、敷石住居、竪穴住居２棟が復元されています。敷石住居の室内の面積は約８㎡、竪穴住居は約 20 ㎡と約 18 ㎡で、竪穴住居には５～６人住めたそうです。中に入ってみると暗く電気をつけないと足元も見えません。当時の暮らしはどんなだったのでしょうか。そのヒントが展示コーナーにありました。火おこしの道具や黒曜石で作ったヤリ先、土器製の食器類、藁で編んだかご等々。ヤリで動物や鳥を捕まえ、毛皮にしたり肉を食べたりしていたのでしょう。木の実を拾い料理をしていたのでしょうか。

現在の私たちは電気をつければ明るくなり、蛇口を回せば水が出てガスをつければ火がつきすぐ料理が出来ます。当時の暮らしはいかに大変だったことでしょう。そんなことを思い起こせば多少の苦労は頑張れそうな気がしてきました。（井口文江）

≪『旧聖跡記念館』≫

桜ケ丘公園内の小高い丘の上に建つ「旧聖跡記念館」。この付近は明治天皇が行幸し猟や野点を楽しんだ地とされる。館内には明治天皇の騎馬像や歴史的文物・書などが展示されている。また天皇自らが使用し従者に下賜されたとの杖が展示されている。自然木のようだが如何にも重厚感があり、天皇が直接手にされたという杖は必見だ。館の外には芝生の広場があり眺望を楽しみながら一服するにはちょうど良い。のんびり寛ぐ家族連れの姿もある。園内の小路を歩くと人手が加えられていない自然そのままの雰囲気が感じられる。入口近くには御製の句碑がある。『春ふかき　山の林にきこゆなり　けふをまちけむ　鶯の聲』自然をそのままに感じ取り詠まれたと思われる句だ。園内には若葉や花が楽しめる樹々も多い。さらに記念館から少し離れた地点まで足を伸ばし「ゆうひの丘」に立つ。この高台からは、多摩川や京王線沿いの風景が一望できる。公園内はふんわり柔らかな落葉のクッションが多く、散策していても疲れを感じさせない。（小林清次郎）

≪関戸の古戦場跡≫　関戸橋を南に渡り、旧鎌倉街道に入って５分位歩くと関戸の古戦場跡がある。

スマホのマップでは目的地到着となっていても、道路沿いのお地蔵さんの脇にある関戸古戦場跡との案内を見ても、どこにもそれらしい所が無く、近くをうろうろするばかりだった。そんな時に偶々ご近所の方が道案内をしてくださることになり、その辺一帯が全て古戦場だったことを知る。

幕府軍の北条泰家は、新田義貞率いる反幕府軍との交戦で、分倍河原に続き関戸でも敗戦して鎌倉に逃走。家臣の横溝八郎は泰家を守って討ち死にした。その墓と伝えられる塚が残っており、現在でも供養が行われている。掃除や仏具にも配慮が行き届いている様子から、大切に守られてきたことが伺われる。個人の敷地内だったが、お知り合いのお宅ということで祠の近くまで行って写真を撮ることができた。思いがけない親切と出会いに心温まる取材となった。（中井博子）

＜多摩市を歩いて＞　多摩川の対岸にある多摩市。多摩センター駅から坂道が多い多摩丘陵を歩きました。お昼近くに立ち寄ったのは多摩市立市民活動センター。令和４年に旧北貝取小学校を使ってできた施設です。施設内は活動施設やふるさと資料館、Kitakai というカフェ&バーがありました。

この地で生活していた人たちの、生活道具や発掘された土器などの展示がみられる資料室を見学。農業・養蚕・炭作りなどの生活道具があり、多摩ニュータウンができる以前の営みを知ることができる場所でした。「貝取」という地名は貝の化石が多く発見されたことや一帯が馬の放牧地であったことから「飼取」の語源からも由来しているのでは？とも言われています。

縄文時代の土器や住居跡が見つかっていることからも、人々の長い歴史の流れを感じられる場所でした。（辻　麻美）

≪多摩丘陵散策≫（奥野英城）は「悠 WEB」上に掲載 ⇒

≪多摩丘陵散策≫　多摩丘陵は、多摩川対岸の府中から眺める姿が「多摩の横山」とよばれる。　我が家の南のベランダからは、多摩市、稲城市方面の山々が東西に連なった低い連山に見える。実際に地形図を見ると、多摩川の右岸（多摩丘陵）と左岸（河岸段丘）では全く様子が異なる。面白いことに、浅間山の地質は多摩丘陵の地質におなじで、もともとつながっていたものが、古多摩川の流れによって周囲が削られて、浅間山が孤立丘として残ったものだそうだ。

私は「多摩の横山」ながめていつも、万葉集の次の歌を思う。

「赤駒を山野に放し捕りかにて多摩の横山徒歩ゆか遣らん」（宇遅部黒女）

この歌碑は、府中の郷土の森博物館の多摩の横山を望む場所にある。防人として九州の地に出発する夫を府中まで見送りに来た妻の夫を思う歌とされているが、おそらく彼は武蔵国には戻れなかったのだろう。

この歌が心に響くのは、私の父も太平洋戦争のとき、母子を故郷に残して赤紙一枚の召集で呉の軍港からニューギニアまで送られ、帰ってこなかったことが重なり合うせいである。残された母の苦難の人生はいかばかりであったかに思いを馳せる。最近、ウクライナでの戦場での兵士と留守をまもるその妻の姿は痛々しく、同じことが起きているのだろう。

戦後８０年、私たちは平和な時代を生きてきたが、中国の圧力におびえて、おおくの若者が南西諸島の兵役に就くというような時代がこないことを祈る。祈るだけではだめで、そんな事態がこないように、平和和な世界を作るように心がけていきたい。

多摩丘陵は、今はニュータウンが建設され自然豊かな住宅地になっている。坂道や階段のアップダウンはきつかったが、平和、平和を念じながら、唐澤山吉祥院門前のお地蔵さんが見守る坂道を歩いた。（奥野英城）